



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4365号 2018.5.8 発行

津久井やまゆり園ありがとう 再建へ取り壊し始まる

朝日新聞 2018年5月7日



障害者施設「津久井やまゆり園」の東側居住棟。植松聖被告は右端手前の部屋の窓を割って侵入し、19人を殺害した後、管理棟から逃走した＝2018年5月6日午前11時52分、相模原市緑区、朝日新聞社ヘリから、仙波理撮影



津久井やまゆり園の正門前に三角コーンを設置する業者＝2018年5月7日午前8時53分、相模原市緑区千木良、飯塚直人撮影

2年前の7月に入所者19人が殺害される事件が起きた障害者施設「津久井やまゆり園」（神奈川県相模原市緑区）で7日、建物の一部の取り壊し工事が始まった。事件現場となった居住棟などが来春までに壊され、新たな施設が建てられて2021年度には使えるようになる予定。

この日は午前8時半ごろ、園の正門に資材を積んだトラック2台が入り、仮の囲いを設けるなどの作業が進んだ。

事件で重傷を負った尾野一矢さん（45）の母、チキ子さん（76）はこの様子を見守った。一矢さんは現在、横浜市港南区の仮入所先で暮らす。チキ子さんは「津久井やまゆり園ありがとう」と涙ながらに話し、「楽しみに通ったのを思い出す。またその日が来ることを信じている」と言葉を絞り出した。

入所者の家族会の大月和真会長（68）は「高い仮囲いは絶望の壁ではなく希望への扉と受け止め、これから一つひとつのプロセスを納得しながら進め、悔いなきよう見守っていきたいと思っています」などと弁護士を通じてコメントを出した。

設置者の神奈川県は昨年、小規模な施設を分散して建て直す構想を入所者の家族に提示。これまでの園の場所と、港南区の仮入所先に132人分の居室と日中の活動の場などになる拠点施設をつくり、入所者の希望を聞いてそれぞれの定員を決める方針だ。

一方、殺人などの罪で起訴された元職員の植松聖（さとし）被告（28）については、横浜地裁が今年1月、精神鑑定のための留置を決定。公判の時期は決まっていない。（飯塚直人）

やまゆり園家族会長「高い仮囲いは希望への扉」

朝日新聞 2018年5月7日

津久井やまゆり園の入所者家族の会「みどり会」の大月和真会長（68）は7日、弁護士を通じてコメントを出した。

本日、津久井やまゆり園の入所棟の除却に伴う仮囲いが設置されました。

未曾有の事件から約2年となるのを前にして、いよいよ思い出の一杯詰まった宿舍の取り壊しがはじまります。

今日の日を迎えて改めて思うのは昨年10月に再生基本構想が決定されたことの意義です。当初の構想ではもっと早い着工予定でしたが、今日を穏やかな気持ちで迎えることができるのも一重にあの決定があればこそと、黒岩知事をはじめとする県職の皆様のご尽力に改めて感謝を申し上げます。

私達（たち）にとって掛け替えのない津久井やまゆり園、思いでの一杯詰まった施設が本当になくなってしまふのかと考えると、寂しさとやるせない気持ちで一杯ですが、改修か建て替えかの選択肢から建て替えを選んだ家族会の判断は間違っていなかったと思っています。この施設がこれから50年、100年と必要だとの強い思いが導いた結論だからこそ、皆でこの現実を受け止めて前を向いて行けると思います。

ですから、寂しさやそもそもあんな事件が起こったことに対する悔しさなども含め、新しく生まれ変わる津久井やまゆり園は皆様から褒めて頂けるような施設に是非ともして欲しいと思っています。

高い仮囲いは絶望の壁ではなく希望への扉と受け止め、これから一つひとつのプロセスを納得しながら進め、悔いなきよう見守っていきたいと思っています。そしてそれが事件で亡くなられた19名の方々への鎮魂に繋（つな）がり、私達に頂いた多くの方々からの励ましに答えて行くことではないかとも思っています。

今は只（ただ）、この除却工事が一つの事故も無く無事終了することを心から祈っております。

やまゆり園の日常もう一度 絆復活願う近隣住民

朝日新聞 2018年5月7日

津久井やまゆり園の正門周辺に、工事のための仮囲いを設置する業者＝2018年5月7日午前10時7分、相模原市緑区千木良、飯塚直人撮影



津久井やまゆり園がある相模原市緑区の千木良地区の住民らは、事件前のように園との強いつながりが復活することを夢見ている。

「元職員やその家族が園への理解を深めてきた。園の行事に参加したことのある住民も多く、目に見えないつながりがある」。この地区で暮らす太田顕さん（74）はそう語る。自身も園の元職員。「建物の中は目をつむっても分かる」という。慣れ親しんだ建物が壊されることは、やむを得ないと感じている。「ここで取り組まれてきたことが一番大事。新しい施設ができれば、また地域との関わりを密にしたい」と話す。

近くに住む長谷川兌（とおる）さん（70）も早期の建て直しを希望してきた。地域の運動会には、入所者や園の職員も参加してきた。「入所者が引っ越してから交流がなくなっている。つながりが戻って欲しい」と再建に期待を寄せる。（飯塚直人）

絵本作家の加古里子さんが死去 「だるまちゃん」シリーズ 共同通信 2018年5月7日



死去した加古里子さん

「だるまちゃん」とてんぐちゃん」「からすのパンやさん」など加古里子さんの絵本



戦後の児童文学に大きな功績を残し、「だるまちゃん」シリーズや科学絵本などで知られる絵本作家で、児童文化研究家の加古里子（かこ・さと

し、本名中島哲＝なかじま・さとし）さんが2日に死去していたことが7日、分かった。92歳。福井県出身。葬儀・告別式は親族で行った。

1948年東大工学部卒。昭和電工の研究所に勤める傍ら、川崎市の貧しい地域で社会事業（セツルメント）に加わり、子どもたちに手作りの紙芝居を演じた。それが「どろぼうがっこう」などの優れた絵本を生み、絵本作家の道へと歩んだ。

「だるまちゃん」シリーズなど、おおらかでユーモラスな作風で幅広い層に愛された。

【注目の一冊】小さな命守れ 虐待の最前線をリアルに描く 「走れ！児童相談所」

産経新聞 2018年5月7日



走れ！児童相談所（2） 光に向かって

親や同居の大人による虐待で、小さな子供の命が失われる痛ましい事件が後を絶たない。一方で、子供の命を守る“最後の砦（とりで）”とされる児童相談所（児相）は、相談者のプライバシー保護のため、その実態はあまり明らかにされず、死亡事件などの際、報道される所長が謝罪する姿をイメージする人も多いだろう。こうした児相の実態を知ってほしいと、現場で子供の命と向き合った元児童福祉司、安道理さんがフィクションを織り交ぜつつも知られざる児相の姿をリアルに描き出した『走れ！児童相談所（2） 光に向かって』が、じわり注目されている。（木ノ下めぐみ）

子供を窮状から救い出すため

県庁の一般行政職から子ども家庭センター（児相）へ異動となった主人公・里崎。突然の辞令に仕事内容も分からず、同僚と「子供と家庭に関することをする」と簡単に考えるところから物語は始まる。

それまでは「遠い国の風景だと他人事（ひとごと）のように思っていた」過酷な状況の親子に衝撃を受けつつも向き合いながら成長していく過程に光を当てた前作「走れ！児童相談所」から、今作では一人前のケースワーカーに成長した里崎。親が住民票を移さずに住居を転々と変え、学校へ通えない子供や、継父から性的虐待を受ける少女と出会う。彼らを窮状から救い出そうと職員らと奔走する姿を描く。

安道さんも西日本地域の一般行政職として働いていた30代、突然の児相への配置転換に。「里崎同様同じ組織に所属しながら、児相の仕事内容を知らない一般行政職は多い」と

話す。その後、再び配置転換となるまでの約5年間、児童福祉司としてさまざまな相談に対応してきた。

ゴミ袋の間で幼児が寝息

物語の中で、里崎は貧困家庭に立ち入り調査を行う。室内に積み上げられたゴミ袋の間をおびた数多くのゴミムシやゴキブリがうごめき、その中で幼児が寝息を立てる。実際にそんな情景を何度も目にしたという。性的虐待とみられる事案も多く担当したといい、「知的障害のある子はなかなか言い出せず、問題発覚が遅れる。子供の証言の信頼性を問われ、つらい思いをすることも多い」と打ち明ける。

厚生労働省によると、平成28年度の児童相談所における相談対応件数は45万7472件。このうち児童虐待相談は12万2575件にのぼり、年々増加傾向だ。一方で、ニュースで報道され、多くの人を知るところとなるケースは氷山の一角に過ぎない。

《「私たちの仕事は常に子どもの死が付き纏（まと）うのよ。（中略）一体いくつの児相がマスコミにたたかれたかを考えればわかるでしょ」「児相の所長が頭を下げるシーンは何度も見たよ》

知られていない児童相談所の内情

作中の主人公と同僚の会話は、安道さんが執筆を始めたきっかけにも重なる。「虐待死のたびに報道の矢面に立つ児相は子供を助けられない機関だと思われがちだが、増え続ける相談件数に対応する職員は慢性的に人手不足で疲弊している」と厳しい職場の状況を訴える。「1件1件に真摯（しんし）に向き合いたい、時間が足りないのも事実。でも職員は子供を救いたい一心で日々努力を重ねる」と訴える。

「組織内でも児相の内情を詳しく知らないのに児相は不人気部署といわれがち」と安道さん。「子供の命が両肩に乗っているというプレッシャーはあるが、困っている子供を救うことができる何物にも代え難いやりがいのある仕事」と強調。ペンネームは理想とする児童福祉司像である『『安』全な『道』へ導き、『理』性的に向き合う』からとったという。

専門書は多く出版されているが、一般向けのお仕事小説や映像作品で、児相を舞台としたものは職務内容を明かせない性質上、少ない。『走れ〜』の1作目も初めは自費出版で、映像化の話も持ち上がったが、「デリケートな内容だから」と断念された経緯がある。「児相の仕事のやりがいを多くの人に知ってもらい志す人が増えたら。それが児相を離れた自分ができる唯一の恩返し」と話した。

『走れ！児童相談所（2） 光に向かって』は大手書店やHPで購入できる。詳細は https://community-publishing.net/hashirejisoo_2/

身近な人が認知症に…対応学べるゲーム、大学生が制作 豊平森



朝日新聞 2018年5月7日
認知症がテーマのゲームを作った(右から)佐竹真奈さん、竹内なみさん、宇井真輔さん、奥田健人さん=愛知県美浜町の日本福祉大学

ある日突然、身近な人が認知症になったら——。そんな時、戸惑わずに適切な対応ができるようにと、日本福祉大学社会福祉学部（愛知県美浜町）の学生たちが2種類のゲームをつくり、インターネット上で無料公開している。子どもから大人まで楽しめ、「認知症の基礎を広く知ってほしい」との願いが込められている。

公開しているのは、「笑顔ですごそう〜認知症のおじいちゃん・おばあちゃんへの声かけ〜」と「キオク旅」だ。今年度、「地域研究プロジェクト」を履修して認知症啓発を学んだ

2年生が作り、イベントで子どもたちにも体験してもらって改良を重ねた。

「笑顔ですごそう」は竹内なみさん（20）と佐竹真奈さん（20）の作品で、数分のできる。主人公「なおちゃん」の祖父母は同じことを繰り返したり、季節が分からなくなったり。場面ごとにどんな声をかけるべきかを2～3の選択肢から選ぶ。

給食中倒れ生徒死亡、元校長ら書類送検 業過致死の疑い 朝日新聞 2018年5月7日

大分県別府市の県立南石垣支援学校で2016年9月、高等部の女子生徒（当時17）が給食中に倒れ、その後死亡した事故で、県警別府署は7日、当時の校長（56）ら4人を業務上過失致死の疑いで書類送検し、発表した。容疑を認めているという。

ほかに送検されたのはいずれも当時の担任教諭（43）、養護教諭（49）、同（55）。同署によると、4人は16年9月15日、当時高等部生活教養科3年の林郁香（ふみか）さんが給食をのどにつまらせた際、見守りなどの義務を怠り、的確な応急措置をしなかった疑いがある。両親が17年1月に同署に告訴していた。



日本初 運賃無料“タクシー”運行へ 「15歳起業」の若手実業家が新会社 産経新聞 2018年5月8日 ノモックの無料配車サービスのイメージ広告

最年少社長として15歳で起業したことで知られる若手実業家が、平成31年3月から、日本で初めての無料の配車・運行サービスを始めることが分かった。利用者は専用のアプリを使って配車を受け、車内のディスプレイ

に店や商品などの情報が流される。走る広告塔として、運賃に当たる運行コストは広告の sponsor が負担する仕組み。8日に正式に発表する。（大塚昌吾）

新会社は「nommoc（ノモック、福岡市）」で、社長は15歳で大型イベントの映像演出などを手がけるセブンセンスを設立した吉田拓巳氏。

新会社は、日本クラウドキャピタルが運営する株式投資型クラウドファンディングサービスのFUNDINNO（ファンディーノ）を通じ、目標額5千万円を調達する。8日夜に募集を開示し、12日から申し込みを受け付ける。

無料の配車サービスは、社名と同じサービス名で、コンパクトシティである福岡市天神を中心に10台ほどでスタートし、東京五輪・パラリンピックが開催される2020（平成32）年をめどに、東京など主要都市での展開を目指す。その後、シンガポールなどの海外市場にも進出する計画だ。

具体的には、米ウーバー・テクノロジーズが運営する自動車配車サービスのように、スマートフォンの専用アプリで配車を受ける。アプリからは利用者の情報が送られるため、乗車中、車内の広告ディスプレイには、利用者が興味を持っているファッションブランドやランチのおすすめなどが常時配信される。

同社によれば、将来的にはAIを活用して利用者の行動パターンを分析したり、好みを学習したりして、顧客と企業のマッチングをより高めるといふ。

発達障害の子供たちに「そらいろプロジェクト」 気持ちよく調髪する工夫

産経新聞 21018年5月8日

髪を切る—そんな当たり前のように思えることが、感覚が過敏な発達障害の子供にとっては大きな“挑戦”になる。これまで2千人を超す発達障害の子供の髪をカットしてきた京都市伏見区の理美容師でNPO法人「そらいろプロジェクト京都」理事長の赤松隆滋さんは、工夫を重ねた手法「スマイルカット」を全国に広める活動をスタートさせている。

東京・池袋で、理美容師ら約100人を対象にセミナーを開催した。



セミナーで講演する赤松隆滋さん

◆感覚過敏でパニック

赤松さんはセミナーで、発達障害がどんなものかを知らずに初めて担当した8歳児の苦い体験について語った。何とか無事にカットできたので、最後にうぶ毛を刈ろうとバリカンのスイッチを入れたとたん、子供は泣き叫んで走り回ったという。「バリカンやドライヤーはダメだとお母さんから聞いていたのに、甘く見ていた。初めて子供のパニックを見て、その夜は後悔の気持ちで眠れませんでした」と振り返る。

セミナーで「発達障害の子供は、じっと座ること自体がまず困難」と指摘したのは、自ら発達障害で発達障害支援グループ「アンバランス」の代表理事を務める元村祐子さん。「感覚過敏であることが多く、首に巻くカットクロスはかゆくてたまらないし、ドライヤーやバリカンの音は爆音のように感じる」と話す。

「そらいろプロジェクト」作成の絵カード

日本発達障害ネットワークの事務局長、橋口亜希子さんも発達障害のわが子のことを振り返り、「うちの子は髪を切るのを“痛い”と言っていた。だから寝ている間に切ったり、お風呂で切ったり。親によっては押さえつけてカットすることもあるので、余計に嫌になってしまう」と述べた。

◆進み具合を視覚化

赤松さんはその後、独学で発達障害や認知行動療法について学び、試行錯誤を繰り返したという。こうして身につけた発達障害の子供たちのカットをするためのポイントを提示した。

まず、子供を怖がらせないよう、笑顔で話しかけるなど楽しい環境づくりをした上で、これから何をするのかをきちんと分かってもらうことが大切だという。

そこで、カットの段取りの説明が重要となる。発達障害児にとって「これからどうなるのか」という見通しが大切。そこでオリジナルの「絵カード」などの小道具を用意した。絵カードには「椅子に座る」「カットクロスを巻く」「霧を吹きかける」「ハサミで髪を切る」など、ひとつひとつの作業が描かれている。ひとつ終わるごとに減らして作業の進み具合が視覚的に分かるようにする。時間のかかるカットでは、タイマーを用いて「じっとしている時間」が目で見られるようにするという。

嫌なものではないと分かてもらうため、理美容師が自分でモデルを示すことも大切だという。カットクロスを自分に巻いてみせたり、自分の髪に霧を吹きかけたり。「とにかく子供に納得してもらうことが肝心です」と赤松さん。

◆みんなで褒めれば

最後のポイントは、我慢してカットをしたら、どんないいことがあるのか、という「結果」のフィードバック。頑張ったことをほめたり、お菓子などをプレゼントしたり、写真に撮って「かっこいい」と喜んだり。赤松さんは「カットは嫌なものだけど、それを上回る“報酬”があれば、またカットしようとなる。仮にその日に想定していたところまで進めなくても、できた部分を褒める。少しずつ成功体験を積み重ねることが、子供の自信につながります」と話す。

発達障害者に対する理美容技術プログラムを研究する京都光華女子大の南多恵子講師は「ついに日本でこういうセミナーが開かれるところまで来たかと感慨深い。発達障害の子供たちの個別の問題をよく理解して、誰もが気持ちよくカットができるような社会にしてほしい」と語った。



容姿や性、人間関係など、がん患者に「語らぬ悩み」 アンケートで浮き彫り

産経新聞 2018年5月8日

久村和穂金沢医大講師

がん患者が抱える悩みには、容姿や性、人間関係など、医療者に助けを求めにくい種類があることが金沢医大講師でソーシャルワーカーの久村和穂さんらの調査で分かった。情報があれば解決できる問題も多く、各地の拠点病院に設置されている「がん相談支援センター」などですくい上げる工夫が求められそうだ。



石川県内で通院治療や経過観察中の患者に匿名でアンケートを実施。生活や医療に関する24種類の悩みについて深刻さと支援の必要性を尋ねると、「困っているのに助けは求めない」悩みが見えてきた。回答した109人の平均年齢は64歳、女性が60%だった。

抗がん剤治療に伴う脱毛や爪の変色など「容姿の変化」には41%が困っていた。ウィッグ（かつら）の活用など外見ケアを学び、助言できる看護師も増えているが「助けが必要」と答えたのは困っている人の28%のみ。

「仕事」に困っている人は18%いたが、支援が欲しいとしたのはその一部。他方、休職中に傷病手当金が受給できるのを知らない人が多いことは、別の調査で明らかになっている。

「性に関すること」「家族との関係」でも支援を求める回答は少なかったが、例えば治療で子供を持つ能力が失われる可能性がある場合は治療開始前に医師に相談することで回避策を探れるし、子供へのがんの伝え方については、パンフレットや相談員の助けを借りる道もある。

久村さんは「治療以外の悩みを医療者に相談することに遠慮や諦めがあるのかもしれない」と推測。「支援可能な項目を一般論として早めに伝えるなど、対応を工夫する必要がある」と話す。

社説 「セクハラ罪はない」発言 麻生氏の非常識いつまで 毎日新聞 2018年5月8日

今なお、セクハラ問題の本質が理解できないのだろうか。常識外れの発言に改めてあざんとする。

麻生太郎財務相が、辞任した福田淳一前財務事務次官のセクハラ問題について「セクハラ罪という罪はない」「殺人とか強制わいせつとは違う」などと発言し、依然として福田氏を擁護する姿勢を見せた。

遅きに失したとはいえ、財務省は福田氏の行為をセクハラと認定して処分した。ところが処分の最高責任者である麻生氏が、なぜこうした発言を続けるのだろうか。

被害を受けた女性社員が所属するテレビ朝日が調査継続を求めているにもかかわらず、財務省が調査を打ち切るというのも納得できない。

そもそも今回は、セクハラは犯罪に当たるかどうか問われているわけではない。無論、セクハラ行為は場合によっては刑法の強要罪や自治体の条例違反に問われる可能性がある。一方では既にセクハラ罪を設けている国もある。しかし、それは今回の本質とは別の話だ。

しかも刑法だけが社会の規範ではない。倫理観やマナー等々もそれに含まれる。例えば文部科学相が「いじめ罪はない」と言って、いじめの加害者を擁護したら許されるだろうか。セクハラは重大な人権問題だ。いじめと同様、セクハラをなくそうとするのが政治家の務めのはずだ。

いずれにしても麻生氏の発言は根本的に間違っていると断言していい。

質問する記者を時に威圧しながら、こうした持論を繰り返す麻生氏に安倍晋三首相が何ら注意をしない点も見逃せない。

ここで麻生氏が辞任すれば、批判の矛先が首相に向かうことを恐れているのか。3選を目指す秋の自民党総裁選を控え、麻生氏の支持が得られなくなる事態を避けたいと考えているのか。政局的な思惑ばかりが優先している。

自民党内では「いつもの麻生氏の乱雑な発言だ」「いずれ麻生氏は森友学園問題での文書改ざんの責任を取って辞任するのではないか」といった反応が大勢で、事態を深刻に受け止める声はほとんど聞こえない。

このまま放置すれば、「女性の活躍をうたいながらセクハラに寛容な安倍首相と自民党」という見方が定着するだろう

(社説) 刑務所逃走 「塀なし」の意義大切に 朝日新聞 2018年5月8日

受刑者の逃走で多くの人が不安を感じた。再発防止策の検討が不可欠だ。ただ、受刑者の自立と円滑な社会復帰を促す試みの積み重ねを大切にしたい。

「塀のない刑務所」として知られる松山刑務所大井造船作業場(愛媛県今治市)から4月上旬、20代の男が逃げ出した事件は、男が広島市内で逮捕されるまで20日余りを要した。その間、今治市としまなみ海道でつながる広島県尾道市の向島では厳しい検問が続く、スポーツ大会が中止されるなど、住民の生活に大きな影響が出た。

警察の取り調べに対し、男は逃げた理由として刑務官や他の受刑者との人間関係をあげているという。捜査結果を踏まえつつ、刑務所としてもまずは動機を解明しなければならない。

この作業場は造船会社の一角にある。受刑者は敷地内の寮に寝泊まりしつつ、一般従業員とともに働いて溶接などの技術を身につける。外塀も、寮の窓に鉄格子もない「開放的施設」で、1961年に開設された。

一般社会に近い生活を送り、職業訓練をしつつ復帰に備える。出所後の生計にめどをつけるだけでなく、逃げられるのに逃げないよう自らを律し、自立を支える効果も期待する。

凶悪犯は対象外で模範囚が選ばれるが、この作業場を出た人が再び刑事施設に入る「再入率」は1割程度と全国平均の4割を大きく下回る。更生へ一定の効果があるといえるだろう。

この作業場で起きた逃走は17件目で、今回は02年以来だった。敷地内に監視の死角がないか、対象者の選抜基準や心情の把握、逃走直後の対応などに改善すべき点はないか、しっかり検証してほしい。

法務省は再発防止策を練る委員会を立ち上げた。監視カメラと顔認証システムを組み合わせた仕組みのほか、受刑者本人の同意が得られればGPS(全地球測位システム)の端末を装着させる案も出ているという。

GPSを使えば逃走者の追跡が容易になり、抑止効果もあるだろう。ただ、受刑者の自尊心を傷つけ、更生に逆効果にもなりかねない。施設の意義そのものを損ねてしまう。

作業場の地元では、開放的な施設運営を続けるよう求める声が出ている。受刑者が清掃活動を続けるなど、地域社会に受け入れられてきた証左だろう。

各地の刑務所には、弁護士や有識者、住民らからなる第三者委員会が置かれている。松山刑務所の委員会では、地元の意向を尊重しつつ、施設のあり方を多角的に議論してほしい。月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

